



阿佐ヶ谷教会

信友会 会報

夏期修養会 特集



ナザレ修女会聖家族礼拝堂

＜教会が変わる時＞

故・辻宣道牧師の「教会生活の処方箋」は、私のようにいい加減な者には耳に痛い事だらけですが、教会生活での指針にあふれています。タイムリーな章の一つ「牧師の招聘は結婚とおなじ」をかいつまんで言うと「全教会員は万難を排して牧師候補の説教を聞く」、「招聘総会の議決に全教会員が従い、後から愚痴を言わない」、「牧師館を徹底的にリフォームすべし」。どれも私たちがこれから行える事ですね。辻牧師はさらに、無牧の期間は教会にとって恵みである、と言います。牧師に当たり前のように任せていた週報作成や求道者対応を教会員が担う事で教会が成長すると言うのです。

阿佐ヶ谷教会は主任牧師が不在の時も牧師に恵まれ、決して無牧ではありませんでした。しかし教職の苦勞を慮り、教会員の奉仕を広げる事は今からでもできる事です。教会の変化の時期、私たちの教会生活もより積極的な方向に変えられるよう願います。
(M. U記)

夏期修養会（7月29・30日開催）報告

修養会テーマ：「祈りの力」

■開会礼拝

「祈りの力」（フィリピ書4-4～7）

大宮 溥牧師

阿佐ヶ谷教会の特徴は、神の国の民として巡礼の旅を続けるために、修養会を大切にし、荒野の旅のなかオアシスへの滞在を許され、信仰の養いと歩むべき道を与えられています。

信友会でも昨今多くの先輩を天に送り、また、高齢、病気などで出席できない教友も多いが、新たに若い会員が参加し、修養会を欠かすことなく続けられていることを感謝します。

今年度のサブテーマが「祈りの力」ですが、ここから出エジプト記のイスラエルの民がシナイへ入ったときの戦いを思い浮かべます。出エジプト記第17章8節で、強力なアマレクの軍が襲ってきたので、ヨシュアに若者を指揮させ応戦させます。モーセは丘の上に立って神の杖を手に持って天に向かって祈りました。彼が手を上げている間はイスラエルは勝ち、下ろすとアマレクが勝ちました。そこで、アロンとフルがモーセを石の上に座らせ疲れた腕を支えて終日手を掲げた結果イスラエルが勝利しました。人生は戦いであり、神と闇の力(サタン)の衝突の中で生きてゆかねばなりません。教会の群れは、真の羊飼いである主の手に自分を委ね、導かれて共に歩むのです。フィリピの信徒への手紙第2章12節から、だから、私の愛する人たち、いつも従順でいて、恐れおののきつつ自分の救いを達成するように努めなさい。不平を言わず神の言葉に従うのです。16節からでは、命の言葉をしっかり保ち、真の羊飼いである神のご臨在と御言葉を心に刻んでその群れになること。神の言葉に励まされ、力を与えられたとき喜びが与えられます。絶えず祈り、全てに感謝して神への従順の旅を喜びを持って進むのです。4章4節から、「主において常に喜びなさい。重ねて言います。喜びなさい。主はすぐ近くにお



(開会礼拝の説教をする大宮溥牧師)

られます。」人生における最大の困難は思い煩いです。最初に神の言葉が与えられ、それを従順に聞き取り、心を開いて受け入れるのです。6節から、「何事につけ感謝をこめて祈りと願いをささげ、求めているものを神に打ち明けなさい。そうすればあらゆる人知を超える神の平和が、あなたがたの心と考えとを、キリスト・イエスによって守られるでしょう。」力強い言葉です。

祈りには二つの姿があります。個人の祈りと共同の祈りです。群れとしての祈り、神の民として歩むうえで祈り合うことが大切です。現在の日本社会

では高齢化のなか、教会に来られない人が多くなりますが、真の羊飼いであるイエス・キリストに支えられ、聖霊に燃えて、おかれた場所で祈ることです。教会は「祈りの共同体」でありたいものです。

祈りの集大成は「主の祈り」です。天地と生命のすべての基礎を創られた神を崇め、神の支配と隣人を愛する御国の到来を願います。神の恵みを受けて生きるための糧を願い、神の赦しと互いに赦し合うことを願います。そして病や老いの中にある弱い私を試みに会わせず悪より救い出したまえと祈るのです。

私たちは祈りの共同体を形成し、それぞれ神の国の一部署を、祈りをもって担いたいものです。

(文責：玉澤武之)

■基調講演 「祈りの力」

「希望をもって喜び、苦難を耐え忍び、たゆまず祈りなさい」(ロマ書12-12) 大宮 溥牧師

緑豊かなエピファニー館に信友会の会員一同が集いました。神の言葉に心を開いて歩む力を得たいものである。今年の修養会の主題は教会標語である「希望をもって喜び、苦難を耐え忍び、たゆまず祈りなさい」、そしてサブテーマに「祈りの力」を掲げました。

日本のプロテスタントの歴史 三つの区分

日本における150年のプロテスタントの歴史は、三つに区分できます。第1は明治の初めにキリスト教禁教が解かれ、世界中から宣教の種が蒔かれた時代、第2はの廃墟の中に始まったキリスト教復興の時代、第3は21世紀になりグローバルな時代の中に新しいキリスト教のあり方を模索する時代です。

私は、第2の戦後の荒廃のなかでキリスト教に出会った者です。1945年8月15日はそれまでの思想が一気に崩されます。戦前の日本の心の歴史は、軍国主義の中、日本がアジアのリーダーとして天皇を中心とした家族、八紘一宇の思想のもとアジアへの侵略を行った時代です。純粋培養のように軍国思想を叩き込まれた少年にとって、1945年での焼け野原のなかで、生きるべき基礎が一気に崩されました。翌日の晴れた日にも黒い太陽を見た思いをしたことを覚えています。

中学2年であった私が、日本ばかりでなく世界の歴史を導く力があるのではと思ひ、幼少期に通ったことがある田舎の教会へ行き、教会学校で懐かしい「主われを愛す」を聞いて衝撃を受けました。1年後に受洗し、その後、伝道者へと召されていることを感じて神学校へ進んで今日に至っています。焼け跡の崩れた現実を耕し、新しい神の国を築きあげてゆくという神の恵みの力に触れた経験をしました。

21世紀の世界は、グローバルな潮流の中で新しい精神的な基礎を築かなければなりません。現代の世界の宗教は、キリスト教が最大の宗教ですが、2050年頃にはキリスト教とイスラム教が拮抗した勢力になり、他の勢力を武力で砕こうとする様な働きも見られます。こんな中で新しい精神的基礎を築くうえで、キリストの贖いによる和解の福音に立ち返ることが求められています。

今年度の教会標語は、ローマの信徒への手紙（ロマ書）第12章12節にある「希望をもって喜び、苦難を耐え忍び、絶えず祈りなさい」です。古代の手紙は、商売や家族の情報など短いのが普通ですが、聖書の手紙、特にパウロの手紙は長いのです。ロマ書は福音の中核で「福音の中の福音」と言われ16章にわたります。ロマ書は、2つの部分に分類され、1章～11章は、3章21～26節にある「信仰による義認」を中心に、アダムの裏切り以来罪と滅びの中にあつた人間の罪を引き受けて下さったイエス・キリストの恵みの「教義」を、12章以下には人間がいかにか生きるか、キリストの恵みにより新しくなった人間の生活規範である「倫理」が示されています。



(男声四部合唱の練習も)

Ⅱコリント5章17節には、「だから、キリストと結ばれている人はだれでも、新しく創造されたものなのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。」と言います。キリストの贖いにより私たちは新しく造り変えられたのです。

キリストにおける新しい生活

ロマ書12章1節、2節は、「自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそあなたがたのなすべき礼拝です。あなたがたはこの世に倣ってはなりません。むしろ、心を新たにして自分を変えていただき、何が神の御心であるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また、完全なことであるかをわきまえるようになりなさい。」ここで倫理の基本を示しています。旧約のアダム以来、神と断絶していた関係を、キリストが身をささげて下さり、わたしたちを呼び戻して下さっている。神の献身を受けて私たちもこれに応じて自分自身を献げなければなりません。2節の「この世に倣う」にはこの世の枠に閉じ込めておく、この世の闇の力、死の力に支配される力がありますが、これら悪魔の力に従わないようにする。エゴイズムの支配から逃れて「敬神愛人」の精神により座標軸を憎しみから愛に置くのです。

3節からは、神が一人一人の信仰の度合いに応じて違った賜物を与えて下さる。自分の能力に過信せず、与えられた賜物をもって奉仕すべきであると言います。4節で、人の体になぞらえて、それぞれの部分が働きを補充することによって一つの体が形成されており、各自も互いに部分を担って働いていると言います。6節からは、恵みにより与えられた賜物を例示しています。預言をするもの、奉仕をするもの、教える人、勧める人、施しをする人、指導する人などを挙げてそれぞれ異なる賜物を献げるように促しています。献げられたそれぞれの賜物がキリストの体として働くことによって輝きを増し教会を形成します。

9節からは、「愛には偽りがあつてはなりません。悪を憎み、善から離れず、兄弟愛をもって互いに愛し、尊敬をもって互いに相手を優れた者と思いなさい。怠らず励み、霊に燃えて、主に仕えなさい」。キリストの体を生かすのは愛です。体全体を生かすために流れる血液ともいふべきものが「愛」なのです。ギリシャ語では、愛には4語あり、エロース（男女の愛）ストルゲー（家族愛）フィリア（友愛）とアガペー（神の愛）です。聖書の愛はアガペーであり、上におられる神が下にいる私たちに雨のように愛を注いで下さるのです。ルターの「マリアの賛歌」でも、身分の低い主のはしために目を止めて下さったことへの感謝、神はひたすら下にある私たちに目を注いで下さることへの感謝の歌です。

本年度の教会標語

12節は、主題の「希望をもって喜び、苦難を耐え忍び、絶えず祈りなさい」です。ここでキリスト者が置かれている歴史観に戻らなければなりません。神による天地創造で、神は人間を自分に似せて造り、世界を神の支配のもと、共に生きる世界を創ろうとされました。しかしアダムの裏切りでエゴイズムや自己中心など神と断絶した中で生きねばなりません。イエスの十字架の死と復活によって神と人間の関係が回復したことにより、

神と人間の世界を形成する基礎ができて、神を愛し人を愛する巡礼の道ができましたが、現実の世界はまだ完成していません。まだエゴイズムや欲望など神とサタンのぶつかり合う世界の様相が残っています。標語の12節のパウロの勧めでは、このような光と闇が行き交う世界であっても、キリストの十字架と復活により人の罪を取り除く福音が与えられたのですから、この福音を信じる私たちは、この世の現実の苦しみの中でも絶望するのではなく、勝利の日の確信をもって戦う、終末論的な展望をもって生きることができるのです。イエス・キリストがこの世に再び来られると言う希望があるのですから、この世の苦しみに耐えられるのです。希望と感謝、祈りをもってキリストの再来を待つ終末論的希望のもとに生きるべきなのです。イエス・キリストへの希望を新たに
して倒れても立ち上がってゆく生活を歩みましょう。

私は、毎夜一日の歩みを顧み、その歩みを感謝しつつ、自らのすべてを神さまに委ねて眠りに就きます。神が私を再創造してください。毎日神に生かされていることを確認し感謝しつつ生きる者になりたいものです。信友会員では社会の第一線を終えた人が多くなっています。スイスの精神医学者が高齢者の生き方として、従来の職場など集団での生き方から個人としての生き方を模索すべきだと言っています。ボンヘッファーも人間の生き方として神に決められた部署を委託されていることの自覚を言っています。神の「マンダーテ」（委任統治）です。職業、教育、家族などの分野で自分に神から委託された場所を担い、守ってゆくことを考えて生きるべきです。

（文責：玉澤武之）



（ナザレ修女会エピファニー館の庭で）